

ばってん

事務長会報第15号

平成16年3月31日

長崎県公立学校事務長会

長崎北高等学校内
〒851-1132 長崎市小江原町132
電話 095-844-4411



ホテルモントレ長崎
TEL 095-822-2251
長崎市筑後町4番10号

学校経営と事務長

副会長 中路

徹 (諫早東高等学校)



昨年4月の中地区事務長会において急な副会長推薦要請があり、生来の気の弱さと優柔不断さから断ることもできず、その任を引き受けることになってしまった。

多くの有能な事務長に比べ、その見識や実績にも乏しく、また人前に出ることが特に苦手な私にとって、本会のためにお役に立つことができるのか大変悩ましく心苦しい日々であった。また、事務長会執行部の中に入ってからも、学校・事務長・事務室を取り巻く山積する諸課題を目の当たりにして、これまでの認識の希薄さと勉強不足を痛感させられた1年でもあった。この歳にして「知らざるを知らずとなす」ことのあまりの多さにただ口を閉ざすばかり……。

さて、昨今、「学校経営」ということばをよく聞くようになった。

公法上では「経営」ということばは、公営企業として収益性が課題とされる事業のみに使われ、行政機関がその権限に属する事務処理について、企画・立案・調整及び人事・予算或いは財産等の維持・運営することは全て「管理」と言い、もちろん「学校経営」という項目は見当たらない。

一方、私法上ではどうかというと、「経営」は収益を目的とした企業体について、営業を運営することを指し、一定の目的に合致するように財産を運用することを一般的には「管理」と言う。

では、近年「学校経営」ということばが公立学校についてもよく使われるようになったのは何故か？

従来の学校は、どちらかといえば教育の機会均等の確保・全体的な教育水準の維持向上を主眼においての各学校間の共通性を重視した教育施策の中に組み込まれていたため、独自性は特に不要であったし、従って、そこには創意工夫も少なくよかつた。

その戦後教育の大きなひずみを是正すべく、教育改革の方向として「心の教育の充実・個性を尊重した教育・創意工夫した教育活動を実現できる特色ある学校づくり、学校と地域との連携等」と併せて「学校の自主性・主体性の確立と責任の明確化」が強く打ち出されてきた。

新しい時代に相応しい特色ある学校を創っていくには、自主的な創造力や積極的な社会への対応力が必要であり、従来の組織の硬直化と独善性による閉鎖性は排除していかなければならない。これからの学校裁量権の拡大の中では、従来は出来なかつた『責任ある主体性が発揮される学校づくり』には「管理」を超えた「学校経営」の視点が不可欠のものと

のとなってくる。

ここでいう学校経営とは、「学校自ら政策立案・意志決定及び方針設定をし、人(教職員)・物(施設設備)・金(予算)そして情報(収集・活用・発信)を有効に駆使して、学校の設置目的である教育の効果を實現する」ことであると考えられる。

この中には、これまで欠如していた費用対効果、組織運営の効率化、保護者住民への説明責任の検証・改善も当然含まれてくる。

すでに、東京都では、平成15年度から全ての都立学校で校長が学校経営計画を策定し、それに基づき学校独自に自立経営推進予算を編成する。さらに、16年度には「バランスシート」を作成が義務づけられた。また、組織面では、15年度から「主幹制度」が導入された。

まさに費用対効果・労力対効果を含めた「経営」の取り込みである。

このように教育改革が進むなかで、校長のリーダーシップのもと学校経営計画を策定し、具体化するためには、教育活動面とともに行財政面の係わりが一層重要になってくる。

したがって、その専門分野を支える事務長の存在はこれまで以上に不可欠なものになっていくのは間違いない。

(今日の教育関係者の「教育改革論」には、費用対効果を含めた行財政面からの切り口が欠如しているように見えるのは私だけか?)

いずれにしても、これまで以上に我々自身がその専門性を磨き、また学習指導面にも理解を深めて、経営全般への総合力(能力)を高める努力をしていくことが必須となってくる。

ここまで述べて、一方で少し気がかりなことがある。それは、昭和36年以来ほとんど変わらぬ事務職員の標準定数と、当時からすれば比較にならない業務量の増大である。

学校経営に責任ある立場で今後対処していくには、一定のスタッフ数の確保が不可欠であるし、多くの事務職員の皆さんの頑張りを目の当たりにするにつけても、その苦勞が報われ又過重にならない職場づくりを目指すことも大事であると考えられる。

標準定数法の基準の弾力的運用(最低基準枠の廃止)が言われる中、大変厳しい状況にはあるが、事務長の法制化の火は残しながら、事務業務の明確化と合理化を進めることとともに、精神論ではない客観的で正確な事務総量を計り、説得力ある資料として準備しておくことが大切になってくると思われる。

学校事務職員はスーパー(ウー)マン!

大村養護学校 飯島 裕見子

昨年4月から初めての学校勤務、とまどいばかりの毎日でしたが、あっという間に1年が過ぎようとしています。7年間県立図書館で本に囲まれ、財務規則も人事関係法規にも無縁の生活でしたので、先生方から色々なお尋ねを受けても、直ぐにはピンと来ず、あたふたする姿が皆さんにもご想像できることと思います。

本校は小中学部を持つ病弱養護学校ですので、事務室は事務長、事務職員、用務員、事務補助各1名ずつ計4名です。県内の県立学校の3分の1が事務職2名になっているとお聞きしました。「ぼってん」の前号で長崎南の松尾事務長さんが事務職員の定数問題に触れられ、「5年後、10年後の事務室の状況が気掛かり」と書いておられました。本校でも、事務職員が担う事務は、給与旅費から物品調達、施設管理に工事に関する一連の事務、就学奨励費と多岐にわたっています。

2学期に入って「令達工事はないよね。ランダムなんてわからんし、入札もしたことないのに」などのんきに構えていた新米事務長の学校に土木工事の令達がやってきました。本庁に掛け合っても、学校でやって下さいの一点張り。仕事ですから、「せんばさ」と言われるのはもっともですが、たった女性2人の事務室、目の前が真っ暗になりました。困り果てて、近隣の学校はもとより、あちこちの学校を頼ってご指導を仰ぎました。他校のことなのに、色々とアドバイスの電話もいただきました。なんとか設計・入札・契約を終え、竣工検査を受けるところまでこぎ着けましたが、その間、たくさんの方々に助けていただきました。このことで私が一番に感じたことは、事務職員の皆さんの研究熱心さです。研修会を通してお互い情報交換をされたり、地区で自発的に勉強会をされたりと、感心するばかりです。

学校事務全てに精通し、期日の迫った報告をテキパキこなし、支払日であれば病気もできない、「学校事務職員はスーパー(ウー)マン!」でなければ動まらないのではと思う今日この頃です。

時節柄今夜も送別会、ミセスKが帰る私に声をかけます。「事務長さん、飲み過ぎたらだめですよ。明日休めませんからね」

意見 異見 違見

お引っ越し

虹の原養護学校 主任 菅原 隆 蔵

毎年のことながら「春一番」がやってくると落ち着かない。校舎内を廻るとあちらこちらに目が動く。妙に段ボール箱が目が止まる。「処分しようか、きれいに折り畳むか」判断に迷う。

春は転勤のシーズンだからである。転勤はしかたないが、「転宅付き」なら目眩しそうになる。

「さあ転宅となってしまった。なにから手をつけたらよいのやら……」とはいえ一週間程度で転居を完了しなければならない。手順良くしないと。

1・運送業者の手配(荷物を見積もり車のトン数と搬出の日時を決める) 2・梱包資材の調達(箱、紐、ガムテープ等) 3・梱包作業(家族総出で一気に完成にやってしまう) 4・搬出(できるだけ仕分けを行い搬入しやすいように積み込む) 5・搬入(部屋ごとに整理しながら荷物を入れる) ざっと考えても忙しい。咲き誇った「桜」を横目で見ながら「お引っ越し」は完了する。「お疲れさまでした。」

では、これが「学校のお引っ越し」としたら。準備期間がたいそうかかる。前述の(1)の前にまず各部屋を廻り処分するもの持っていくものを検討する(移動不可能なもの、補充するもの等購入計画作成)。次にだいたいの「トン数」を積算し、延べ台数及び梱包資材総量を決定(搬入先の「養生材料」も必要)。作業員及び監督者の人数を積算する。積算書作成後引っ越し日程を決定(最低3日間は必要)。ここでやっと次の段階となる。業者の決定までが大変だ。入札となると「現場説明」が必要で各室をまわり説明(校舎中の荷物の把握が不可欠、また梱包・養生方法の指示。職員の作業範囲等)する。その後入札までに業者からの質問に回答し、やっと入札となり決定する。職員総出でブツブツ言いながら梱包作業をし、口論しながら「お引っ越し」は嵐の中に完了する。

嵐の過ぎ去ったあと担当者はカルキ臭いお茶をすすり、やっと自分の「心の荷」をほどくことになるのである。

● 事務職員 ●

協会 ウォーキング

先達に学び、仲間に学ぶ

長崎南高等学校 主任 金子 仁

県事務職員協会の目的には「研修(研究)による学校事務の円滑な運営、及び資質の高揚、社会的地位の向上」とあります。この目的に添った、先輩方のこれまでの活動によって、今日の協会があるのだと感謝しています。そして更なる発展を期して、今この時も日々の仕事に悪戦苦闘しながらも、個々としての研鑽、時に代表としての研究に励んでいる素晴らしい仲間がいます。引き続き、こうした活動ができますように、事務長さん方のますますの理解と指導・激励をお願いします。

さて、そうして築き上げてきたことが、日頃のちょっとしたことで信用・信頼を失うこともあります。横柄な言動になってはいないか、仕事以外の話に花を咲かせてはいないか。公務員を見る第三者の目には、近年ますます厳しいものがあります。「建設は死闘、破壊は一瞬」以前先輩から教わりましたが、私自身未だに反省の繰り返しです。

また、自分はいったい何を基調に仕事をすべきかよく見失います。学校事務職員である以上、「生徒のために……」このことさえ忘れなければ、道を誤ることはないとの指導もいただきました。

「実らぬ努力」もあるのかなと感じることもありますが、お互いに勤める学校をさらに一歩押し上げる努力をしていきましょう。仕事は楽しくありたいと願います。明るい話題をお待ちしています。

会 員 漫 筆

還暦のウサギ

桜が丘養護学校 福 田 博

我が家には7年半前に1羽の子ウサギが来た。最初からウサギを飼おうと思っていたのではなく、家の中で飼えるペットを欲しいと思ってリスを探しにペット屋さんに行った。しかし、あいにくリスはいなくて、店の中を覗いていると、可愛い子ウサギが目に入った。生まれて1ヶ月位のミニウサギで、手のひらに乗る位小さかった。私も家内も気に入り買って帰った。可愛いペットの来訪に、子ども達も自分が世話をするというほど喜んだ。見ていると、思わず微笑んでしまうほど、しぐさも可愛かった。籠から出してやると、喜んで走り回り、あまり喜び過ぎて、部屋を曲がる時、転ぶしぐさは何度見てもおかしかった。

娘から、哲人(てつと)という名前を付けてもらって、「てっちゃん」と呼ばれるようになったこのウサギは、人が座っていると、すり寄ってきて頭を押しつける。頭をなでて欲しいのである。布団を敷くと、その中に入ってくる。一緒に寝たいのである。人が何か食べ始めると近くにきて顔を見上げる。気付かずにいるとピョンと膝の上に乗ってくる。手でやおやつをやると、どんなに小さな物でも上手に取る。決して持っている指を噛むことはない。私が家に帰ると足元をぐるぐる

廻る。お帰りなさいと言っているのであろう。

しかし、いいことばかりではなかった。伸びる歯を削るためにやたらかじることも困ったことだった。一番危険なのは、電気のコードをかじることだった。ウサギの飼育書によると、電気のコードをかじっての感電死は結構多いそうである。

それから、殆どの人はウサギは鳴かないと思っているようだが、ウサギの飼育書で、鳴くことが分かった。実際、「てっちゃん」が鳴いたのを家内が聞いている。それは、好物のバナナがビニールの買い物袋に入っているのに目を着け、盗み食いしようとして、ビニールに首が挟まって苦しくなった時だったそう。このように危険な時に鳴くそうである。それはキーッという甲高い声だったそう。

ところで、なぜ「てっちゃん」が還暦なのかというと、ウサギは1年に人間の年では8歳年を取るそうである。それで計算すると去年の9月に56歳で私を追い越したことになる。そして、それから、そろそろ半年だから4歳を加えると、もう60歳になった頃だからである。

最近、若い頃は、あんなにつやつやしていた毛が抜けて、皮膚がむき出しになり、痛々しそうである。獣医さんにも通うようになった。

還暦を迎える「てっちゃん」には、わが家の一員として、いつまでも元気でいてもらいたいと思っている。



先輩から

昭和五十一年に長崎北高等学校を退任された尾崎敏雄様から、今度も俳句をちょうだいしました。ありがとうございます。

尾崎様は昨年めでたく米寿を迎えられ、ますます御壮健でおいでです。月三回の定例会のお世話役を今もお務めで「俳句という仕事を持っていらっしゃるのです」と元気に語ってくださいました。ものごとを深刻に考えず楽天的であることが健康の秘訣とか。

どうぞ、これからも心豊かな日々をお過ごしください。(に)

花屋での世間話や春隣

横丁の迷路が銀座猫の恋

下山して町に着くころ春の雷

啓蟄の鶏つづいて走り出す

植木買ふ夫唱婦随とはゆかず

尾崎敏雄



わが学校ここが自慢

鳴滝高等学校 長岡 昭

新設高校といいながら、施設的には県立短大のお下がりですが、本校は非常に美しい景観を有し、とくに、中庭と由緒ある池が素晴らしい。

池を取巻く庭園は、シーボルトと蛍をイメージしたビオトープ仕様で、蛍が甦る今年の夏が楽しみ。

もっと素晴らしいのは、女性陣の活躍とITを利用した校内情報システム。

県の支援なしで本校自力開発の通信教育支援システムは、基礎研究を終了し、実用化に向けた研究に

入っている。公立高校としては恐らく全国最先端を走っていると思うが、それは公立が遅れている証しでもある。

その副産物であるITを利用した校内掲示板、事務ネットワーク。本校は昼間・夜間定時・通信制と3部制で、職員の勤務時間帯に時間差があり、情報の共有がこれまでアキレスだった。

しかし、事務ネットと各職員専用メールを利用してその弱点を補完。非常に重宝している。

15年度の人事異動で事務職6人中4人異動。しかも開校以来支えてきた超エキスパートだけに、残された者、新しく来た者には苦難の1年以外の何物でもなかった筈。

それを支えてくれたのは、家庭を犠牲にしながら頑張ってくれた女性陣の奮闘。どんなに多忙であっても笑顔と優しい細やかな心遣いを忘れない彼女たち。彼女たちの楽しい笑い声が緊張感をほぐしてくれる。毎日彼女たちと一緒に仕事できるのが楽しい。感謝感謝。

随 想



「歌会始の儀」陪聴記

長崎県高等学校校長協会会長・長崎南高等学校長 定方 郁 夫

平成16年1月14日午前10時、宮殿坂下門より入り、北の車寄せから長和殿「春秋の間」に入る。ここが、歌会始陪聴者の控え室である。陪聴者は約70名、知らない人ばかり、広い部屋の中を興味深く眺めていたら、金子長崎県知事が入って来るのが見える。簡単な挨拶をして、ゆめ総体のお陰でこの席に来れたことなどを話す。

10時15分、呼び込みが始まる。衆議院議長、最高裁判所長官・・・偉い人が続く。呼び込み半ば過ぎ私の番が来た。控え室より回廊へ。回廊は幅7～8メートル、長さは50メートル以上はある。金茶の絨毯を踏みしめ、10メートル間隔で正殿「松の間」に進む。松の間は大儀式室で、紫宸殿に源流を持つ意匠は簡潔で力強い。床は檜の大板、靴音を忍ばせ陪聴席4列目に着席をする。宮内庁長官や式部官等が所定の位置に着き準備は完了する。全員起立してお出ましを待つ。

10時30分、天皇皇后両陛下がお出ましになる。式部長官が先導し、皇太子、親王、親王妃、内親王及び皇族方が供奉され、侍従長、女官長等が随従する。洋装の両陛下を初め皇族方はテレビで見慣れてはいるものの、直接こんなに間近で拝謁するのは初めて、神々しい姿である。皇太子妃殿下の姿が見れないのは残念である。

読師（どくじ）、講師（こうじ）、発声（はっせい）、講頌（こうしょう）が参進し、披講席に着く。司会

役である読師が、一般から詠進して選に預かった歌、いわゆる入選歌の懐紙を取りだし講師に示す。講師は預選者の県名、氏名、を読み上げた後、選歌の全句を朗吟し披露する。次に発声が独特の節を付けて選歌を吟じ始める。第1句目を歌い上げた後、第2句目からは講頌も加わり発声と一緒に合唱する。講頌は4名である。

かくして一人の予選者の披講は終了する。今年の歌題は「幸」、予選者10名の歌、選者の歌、召人（めしうど）の歌が次々と厳粛に披講されていく。今年の召人は大岡信氏、昨年文化勲章受章者である。静謐、荘厳、咳払い一つなく、儀式は静かに進行していく。防音ガラスの向こうには報道のカメラが動いている。私の席からは秋篠宮妃殿下と紀宮内親王殿下のお姿がよく見える。お二方とも微動だにせず、手を前に組んで正面を向いておられる。

皇族殿下のお歌、皇后殿下の御歌（みうた）と続き、最後に天皇陛下の御製（ぎょせい）が披講される。他の方々と異なり天皇陛下の御製は3回繰り返し吟じられる。

「人々の幸願いつつ国の内めぐりきたりて十五年経つ」平成の十五年、平和の世の中で過ごしてきた我が身を思うとともに、昭和の十五年激動の世に思いを馳せる。

「歌会」は万葉の昔から行われていたが、「歌会始」の起源は明らかでない。鎌倉中期に「内裏御歌会」という記録があり、その後断続的に年の初めの歌会というのが記録にあるという。長い歴史と伝統に支えられた儀式である。

11時45分、読師が御製の懐紙を天皇陛下の机に恭しく置いて、全ての儀式は終了する。お出ましの時と同じように式部長官の先導により御退出になる。

至福の時であった。豊明殿側の廊下を回り、控え室で御神酒と肴をいただく。退出時は女優の司葉子さんと一緒であった。坂下門を出て、そのまま外堀を回り九段の坂を上り、靖国神社に参る。「九重の歌会始の幸せを靖国の父にまず知らせたり」

編 集 後 記



年度が改まり、事務長会の顔ぶれも少し変わりました。いつものこととはいえ、いささか寂しい気がしないでもありません。これも、年月の流れと言うべきなのでしょう。「年年歳歳花相似たり 歳歳年年人同じからず」、時あたかも爛漫たる花の候、詩に込められた、いにしえ人の思いが、いやがうえにも心に残ります。

「ばってん15号」をお届けします。今号の随想は長崎高等学校校長協会会長の定方郁夫先生のお手を煩わせ、宮中の「歌会始」についての貴重なお話をいただきました。私ごとき凡夫にはおおよそ縁のない雅やかな伝統文化の世界に、おかげ様で触れることができました。ありがとうございました。

さて、ここからは凡夫にも縁の深い方の伝統文化の話です。先日、嘶家の柳家三太楼師匠が来演しました。師

にとっては4度目の長崎です。2度目までは二つ目として、3度目はなりたての真打ちとしての来演でした。その3度目の長崎で、師の真打披露が賑々しく催されたのです。舞台の上に羽織袴の嘶家さんがズラリとならんで「スミからスミまでズズズイとおお」と口上を述べる、例の御披露目セレモニーです。「三太楼さんが真打に上がったから長崎でも彼の御披露目をやろうよ」と、友人の寄席々亭氏が言い出して、本当に実現させてしまった企画なのです。長崎での真打披露というのは、これをもって嚆矢とするのではあるまいか。あれから3年たちました。

それ以来の三太楼師匠なのです。気鋭の真打として一回りも二回りも大きくなって長崎に帰ってきた師の高座は、それはそれは見事なものでした。その堂々たる高座ぶりから、師の真打としての責任感と地道な努力とがしのばれました。その夜、いつもの店で師が私につくってくれた焼酎のお湯割の旨かったこと。

ところで、事務長になってこのかた、私もせめて半回くりくらは大きくなったのかしらん？ さあね。（に）